

一人の警察官の勇氣に敬意を

小西巡查部長 語り継がれる思い



湯浅警察署鳥屋城分署 ■ 巡查部長(当時巡查)

小西榮次郎(33歳)

殉職年月日 ■ 大正11年8月16日

概要 ■ 同日、有田郡八幡村において強盗犯人逮捕の際、ピストルで撃たれる



■ 巡查部長
要之助(32歳)

大正11年5月22日
山警察署において執務中、
れる。

「こそ泥はいても、凶悪犯罪のほとんど起こらない有田の山奥に一大パニックが起こった」(清水町誌)。

今から96年前、一人の警察官が命を落としました。その警察官の名は、小西榮次郎^{えいじろう}。まだ若く、今後を期待されていたであろう彼は、どんな思いで職務を全うしたのでしょうか。

「ピストル強盗事件」

大正11(1922)年7月31日22時ごろ、海草郡宮前村(現在の和歌山市)で、2人の青年がピストルを持った男に「金を出せ」と

脅された。しかし2人は現金を保持していなかったため、男はそのまま立ち去った。その後、22時30分ごろ、今度は海草郡紀三井寺村(現在の和歌山市)の店にその男は強盗として立ち入った。店の主人とその妻は、男の隙を見て表に飛び出したが、その背後には銃声が響いた。

第2の犯行があつて約30分後、私服の警察官が男を呼び止め、職務質問をした。男は山本清吉^{せいきち}と名乗った。警察官は衣服の上から身体検査をしたが、手に持ったバスケットのの中身は調べなかった。

その後、和歌山警察署は通報を受けて捜査をしたが、山本は居住

地に戻っており、足取りがつかめなかった。

それから約半月後の8月16日、2時ごろ。城山村（現在の清水地域）二川地区の農家の家に山本が押し入った。「金を出せ!」「金はない!」と押し問答になったが、家族が騒いだためか、山本は焦って家屋に銃弾を2発撃ち込んだ。

この知らせは、間もなくして二川地区に駐在していた小西榮次郎巡査のもとへ届けられた。

二川での事件から約1時間30分後、八幡村（現在の清水地域）遠井地区の宿屋に山本が押し入った。山本は左手でピストルを握り、右手に懐中電灯を持っていた。宿屋の主人は逃げたが、2階に呉服行商人が宿泊していた。商人が1階の物音に気付き階段を駆け下りたと同時に、山本が商人目掛けてピストルで撃った。商人は山本に体当たりして組み打ちになったが、山本が懐からもう1丁のピス

トルを取り出した。2丁のピストルにはかなわないと思った商人は、2階へ駆け上がった。その間に山本は、商人が宿に預けていた商品などを奪って逃走した。

16日の朝、小西巡査は、自転車で八幡村の派出所に向かっていた。二川地区での農家強盗未遂事件を報告するためだった。偶然、路上で派出所の警察官と出会い、事件の内容を報告したところ、遠井地区でも強盗事件があったことを聞かされた。小西巡査は、早速付近一帯の捜索に取り掛かる。

その日の20時ごろ、小西巡査は、八幡村楠本地区の茶屋で犯人らしい男が酒を飲んでいるのを見つけた。小西巡査は男が山本であることを確認すると、山本の手をとって表に連れ出した。

少し歩いたところで、山本は突然小西巡査に体当たりし、逃走しようとした。小西巡査はとっさに

山本に組み付き、もみ合ううちに道路わきのくぼみに転落した。山本はピストルを取り出し、構えたが、小西巡査にピストルを奪い取られそうになったので、巡査の手にかみ付いた。

そのとき、銃声がした。小西巡査の手が山本から離れた途端、山本は巡査に銃口を向け、銃弾を浴びせた。一発は胸に、一発は腹に。小西巡査は即死した。

17日早朝、小西巡査殉職の悲報と、山本が現れたという報告が警察部に届いた。

山本は逃走し、那賀郡小川村（現在の海南市）に現れて飲食店に押し入った後、生石山（生石高原）に逃げ込んでいた。

多数の警察官を動員し、付近の村々から住民らが応援に駆けつけ、計1,500人が包囲・捜索。逮捕に至ったのは18日早朝のことだった。

（引用・参考／和歌山県警察史・清水町誌）



小西巡査が事件時、身に着けていた衣服。ピストルの弾跡が当時のまま残されている。

（和歌山県警察 資料室）



小西巡査部長の殉職碑。楠本橋付近国道沿い(=上写真)と二川区の城山神社参道(=下写真)にある。

当時の人々は

その当時、拳銃を使用した犯罪は全国的にまれなものだったそう
で、大事件として取り扱われました。
小西巡査は「勇敢な行動は警察
官の亀鑑きかんであり、人心に及ぼす影
響小ならず」として、巡査部長に
昇任。内務省(第2次大戦前の中
央官庁)から功労記章が授与され
ています。

また、映画製作を行う日本活動
写真株式会社がいにし(当時)にもこの事
件は取り上げられ、映画化。和歌

山県内各地で上映されました。

故小西巡査部長の殉職碑は、大
正12(1923)年5月10日、二
川地区の地元有志により建立。さ
らに、殉職から3年後の大正14
(1925)年8月16日には、地方
の有志、青年会などの寄付によつ
て楠本地区にも建てられました。

語り継がれる思い

小西巡査部長の殉職は、和歌山
県警察にとって忘れることのでき
ない、そして、職務質問や容疑者

同行の際の教訓を残した事件でし
た。現在、湯浅警察署では、湯浅

署管内に着任した新人警察署員に
対し、署長自ら殉職碑まで案内し、
この事件について語っています。
小西巡査部長の写真は、湯浅警察
署3階会議室に飾られています。
また、世話人12人・会員約50人
からなる「故小西巡査部長 顕彰
会」でも彼の勇気と行動を語り継
ぎたいと活動をしています。

「誰かが語り伝えていかなけれ
ば、小西巡査部長の偉業も、先人
の思いの詰まった石碑も、忘れ去

られてしまうのではないかという危
機感を抱きました」と語るのは、世
話人代表であり、顕彰会発起人の一
人でもある坂口緑をりさん。昨年末から
定期的な、石碑の清掃と献花をして
いるそうで、小西巡査部長の命日
ある8月16日(木)には、慰霊碑へ
の奉拝も予定されています。

坂口さんは小西巡査部長につい
て、「当時は通信もままならない中、
応援を待ってられない、村民の命
が第一だ、と考えて行動したのだと
思う」「私は、彼の魂が私たちのこ
とを、今でも見守ってくれているの
ではないかと感じています。殉職碑
の前を通る際には、思い出して欲し
い」と語ってくれました。

私たちが語り継ぎ、時折思い出す
ことで、彼の心はこれからも生き続
けるのではないのでしょうか。

—小西巡査部長

語り継がれる思い 完—